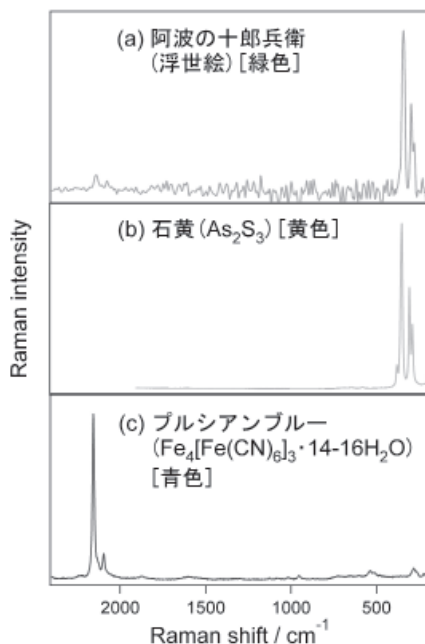


錦絵版木からみる江戸の色



阿波の十郎兵衛



阿波の十郎兵衛の緑部分のラマンスペクトル

「錦絵」ときいて思い浮かぶのは、画題や絵師の名前などと並んで、その多色刷りの鮮やかさではないだろうか。様々な色を使い人物や情景を描く錦絵は、単色摺りが主な版画においてきわめて稀な存在であり、その豊かな色と表現で人々を魅了してきた。しかし、その錦絵の重要な要素である色については、すべてが解明されているわけではない。いまは美術品として扱われることの多い錦絵も、江戸の当時は鼻唄の役者や噂の美人のプロマイド、名所の絵葉書のように庶民が楽しんだもの。色を出すのにどのような材料（色材）を使うかなど、わざわざ伝えるようなことでもな

かったのである。そのため、現在、知られているのは肉眼で見た色の名前や数少ない文献に記された作り方などであり、錦絵を分析しようにも、摺り込まれて紙と一体化した色材の測定は困難であった。しかし、色を摺るために使った版木（色板）ならば、板面上に大量の色材が残っており色材を判別できる可能性がある。そこで、国立歴史民俗博物館が所蔵する世界最大級のコレクションである「歌川派錦絵版木」から、色板を選んでラマン分光法により分析を行った。ラマン分光法はレーザー光を試料に照射し、発生する散乱光を観測する手法であり、そのラマン散乱データから元素の結合に関する情報が得られ、それを解析することにより、対象物の化学構造の推定ができる分析方法である。その結果、輪郭線を描く黒は、二種類の炭素の結晶構造のラマンバンドがみられ炭素由来の墨「丹」と記載された赤は四酸化三鉛特有のラマンバンドがみられ酸化鉛である鉛丹、そして青からはプルシアンブルーに特有のシアン化イオンのラマンバンドが観測され、ペロ藍と呼ばれたプルシアンブルーと推定された。ペロ藍はドイツで人工的に作られた顔料で貿易によって日本に輸入されてきたもの。輸入品であったペロ藍によって、錦絵の青がより鮮やかになり「広重ブルー」などと称され、また海外へ渡ってゴッホなどの画家に影響を与えたと考えられる興味深い。また、緑はプルシアンブルー由来のラマンバンドとともに硫化砒素由来のラマンバンドが観測された。硫化砒素はオーピメント（石黄、雌黄）、リアルガー（雄黄）の二種類があるが、このラマンバンドはオーピメントの結晶構造によるものであり、これより使用された緑はペロ藍に石黄を混合したものであることが判明した。緑は文献では露草と石黄、あるいは藍と棠梨の樹皮から黄色を混ぜたものと言われており、これとは異なる色材が使用されていたことが明らかになった。

だが、色板からの色材測定はまだ道半ばである。現在知られている色材とは違うデータをもたらすものも多い。かつては既知でありながら現在では未知な錦絵の色。これから調査がすすめば、いつか江戸の人々が愛でた色をよみがえらせる日がくるかもしれない。